

Adam Bede, George Eliotにおける肉体の発見

谷, 綾子
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6790332>

出版情報 : 九大英文学. 48, pp.53-85, 2005. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



Adam Bede, George Eliot における肉体の発見

谷 綾子

序

Mary Anne Evans—後の George Eliot—は 1841 年に懷疑論者の Bray 夫婦と出会い、彼らとの親交を深めていくうちにそれまで彼女が抱いていた宗教観に疑問を抱くようになっていった。彼女は翌年の 1842 年にそれまで熱心に信仰していた福音主義からの脱却を宣言し、それ以降生涯無神論者の立場を守り続けた。Bray 夫婦との交友を通して多くの思想家と親しくなった Evans は、次第に Feuerbach や Spinoza の哲学に傾倒していき、とりわけ Feuerbach は彼女に大きな影響を与えたと言われている。¹

以上が、偉大な小説家 George Eliot がイギリス文壇に登場するまでの簡単なスケッチである。多くの批評家は彼女の無神論を宗教への興味の喪失と捉え、彼女の哲学的な側面にばかり注目している。だが、彼女の宗教的な側面を無視することは偏った見方だと言わざるをえない。“‘Religious’ seems to me to be just what she [Eliot] was”²と Basil Willey が評したように、George Eliot が実に宗教的な作家であったことも事実なのだから。Eliot にとって「宗教」は常に作品の重要なテーマの 1 つであり続けた。“I have the profoundest interest in the inward life of sincere Christians in all ages”³と手紙の中で語っているように、George Eliot は敬虔なキリスト教徒に対して深い関心を抱いていたのである。特に *Adam Bede* (1859) は、メソジストの女説教師であった叔母の話をもとにして創られた宗教色の強い作品である。本稿では、*Adam Bede* のヒロインであり、メソジストの説教師でもある Dinah を通して、George Eliot における宗教のあり方に迫ってきたい。

I Dinah の人物像

Dinah はメソジストの説教師であった Eliot の叔母、Elizabeth Evans をモデルにして創られた人物である。ところが作者である Eliot 自身も認めるように、実は Dinah と叔母は全く似ていない。⁴Eliot は叔母の説教はとても激しいものだったと語っているが、Dinah の説教には激しさのかけらもないのである。Dinah は穏やかに話しかけ、人の虚栄心を非難しているときですら、その根底にあるのは厳しさではなく哀れみである。そして、愛と哀れみをもって説教に臨む Dinah の姿は、メソジスト一般からもかけ離れた存在として描かれている。

He had made up his mind to see her advance with a measured step. [. .] He knew but two types of Methodist – the ecstatic and the bilious. But Dinah walked as simply as if she were going to market, and seemed as unconscious of her outward appearance as a little boy: [. .]⁵

ここでは Dinah と一般のメソジストとの違いが強調されている。Dinah は叔母に似ていないどころか、メソジスト一般の型にもはまっていないのである。Dinah はメソジストの特徴的な2つのタイプー恍惚となるタイプと気難しいタイプーのどちらにも該当しない。Dinah は敬虔なメソジストでありながらメソジストらしさに欠けた奇妙な説教師なのである。

彼女の特異性は彼女が教義にこだわらないことに起因している。“Dinah doesn't hold wi' them as are for keeping the Society so strict to themselves” (506) と Seth が言うように、彼女の宗教は教義や宗派を基盤にしたものではないのだ。教義によって国教徒か否かを厳しく区別し、他宗派を弾圧した偏狭な Tyke 牧師とは違い、Dinah は相手がメソジストか否かということにこだわらず他者を助けようとしている。Dinah はメソジストの教義に従わないために、メソジストの一般的な鋳型から免れているのである。だが、彼女の宗教がメソジストの教義を基盤に置いたものではないというの

なら、一体何が彼女の宗教を形づくっているのだろうか。

Dinah の宗教の秘密は、実は彼女自身の感情の中にある。“She was not preaching as she heard others preach, but speaking directly from her own emotions, and under the inspiration of her own simple faith”(29) とあるように、彼女は他の説教師達がするように説教せず、彼女自身の感情と直感から直接聴衆に語りかけている。Dinah にとって説教は、メソジストとしての意見を述べるのではなく、“the inward drama of the speaker’s emotions”(34) を展開することにあるのだ。グリーン広場で行われた Dinah の説教は好奇心だけで集まった人々に思いもよらない影響力を与えたのだが、この影響力の正体はメソジストという宗派の力ではなく、彼女自身の心情の力にあると考えられる。Dinah は「溢れんばかりの愛情」(“shedding love”, 24) から説教しており、その愛情深い声が聴衆の心に直接働きかけたのだ。彼女の行動原理はメソジストの教えではなく彼女自身の愛情の中にあるのである。このことは Dinah が聖書の教えに反していると葛藤しつつも、結局己の愛情のままに Poyser 家の子供達を甘やかしてしまうことから証明されている。Dinah がメソジストらしくないのも無理はない。Dinah がメソジストなのは、彼女の豊かな愛情がたまたまメソジストという宗派に結びついた結果にすぎないのだから。愛と哀れみこそが彼女の宗教の本質なのである。

Dinah の宗教のあり方は George Eliot の考えるところの道徳的な宗教のあり方と一致している。Eliot は、無神論者に転身したあとも、宗教が持つ道徳的な影響力を高く評価し、それに深い関心を抱いていた。彼女が敬虔なキリスト教徒の「内面生活」(“the inward life of sincere Christian”)に強い興味を抱いていたのも、宗教が持つ道徳性を認めていたからである。彼女は 1855 年に発表した Essay において、宗教に対する見解を次のように述べている。

The idea of God is really moral in its influence – it really cherishes all that is best and loveliest in man – only when God is contemplated as sympathizing with the pure elements of human feeling, as possessing infinitely all those attributes which we recognize to be moral in humanity.⁶

ここで Eliot は「神の概念は神が人の感情の純粋な要素に共感する存在として考えられるときのみ、真に道徳的な力を発揮するのだ」と主張している。彼女はキリスト教の真の教えは人への純粋な感情（愛や同情）にあると考えており、教義はその愛を食い尽くす宗教の不純物と捉えていた。“There is no general doctrine which is not capable of eating out our morality if unchecked by the deep-seated habit of direct fellow-feeling with individual fellow-men”⁷ という *Middlemarch* のコメントによく示されているように、Eliot にとって教義とは宗教が持つ道徳性を蝕む毒のような存在だったのである。Eliot はこの不純物たる教義を取り除き崇高な感情のみを基調とした宗教こそ人に道徳的な影響を与える理想の宗教だと考えていた。彼女が否定したのは、あくまで超自然的な神の存在や崇高な感情を蝕む教義に関してであって、宗教そのものではなかったわけである。”Religion, then, for Feuerbach, and for George Eliot, consists preeminently in the love, admiration, sympathy and sacrifice of man for man”⁸ と Bernard J. Paris が主張するように、Eliot にとっての宗教は愛情や同情、そして自己犠牲といった崇高な感情にあったのだ。そして、George Eliot はこのような感情に基づいた宗教にこそ真に道徳的な力があると考えていたのである。

Dinah はまさに Eliot が考えるところの道徳的な宗教を具現化した人物である。Dinah の宗教のあり方—愛や哀れみを基調とした教義に囚われない宗教—は Elizabeth よりも George Eliot の考えに近いもののなのだ。Eliot は Dinah の人物像について次のような手紙を残している。

You see how she [Elizabeth Evans] suggested Dinah; but it is not possible you should see as I do how entirely her individuality differed from Dinah's. How curious it seems to me that people should think Dinah's sermon, prayers and speeches were *copied* – when they were written, with hot tears, as they surged up in my own mind!⁹

この手紙には、Dinah の説教や祈り、そして台詞は Elizabeth からとったも

のではなく、Eliot 自身の心から湧き出てきたものだということが述べられている。つまり Dinah の真のモデルは Elizabeth ではなく、George Eliot 自身だったのである。“Dinah Morris, then, is not a completely realistically drawn Methodist preacher. In her, that part of the Methodist ethos which coincided with George Eliot's own is emphasized, while the doctrinal element to which she was antipathetic is ignored”¹⁰ という Kathleen Watson の指摘は Dinah が Eliot の理想とする宗教概念を体現した人物であることを明確に示している。Eliot は己の理想とする宗教を一つまり崇高な宗教的感情のみを則とする道徳的宗教を—Dinah の中に投影してみせたのである。

George Eliot の小説は実験的だと言われている。Bernard J. Paris は“the writing of a novel was a process of organic unfolding: the ending was not predetermined; rather, it evolved out of the initial configurations of character and circumstance”¹¹ と主張している。実際、Eliot は *Adam Bede* を書く際に、Adam と Dinah の人格設定、Adam の Arthur との関係、彼らの Hetty との関係、そしてクライマックスである牢獄のシーンだけを予め決めていた。そして話のそれ以外の部分は全て彼らの性格や人間関係から発展したものだったのだ。¹²Eliot は己の作家活動を次のように表現している。

But my writing is simply a set of experiments in life – an endeavor to see what our thought and emotion may be capable of – what stores of motive, actual or hinted as possible, give promise of a better after which we may strive – what gains from past revelations and discipline we must strive to keep hold of as something more sure than shifting theory. I become more and more timid – with less daring to adopt any formula which does not get itself closed for me in some human figure and individual experience, and perhaps that is a sign that if I help others to see at all it must be thorough that medium of art.¹³

Eliot の作品は人生における一連の実験なのである。彼女は、思想や感情が何を為しうるのか、どのような目的を追い求めればより良い結果が望めるのか、といった人生の疑問に対する答えを、小説という実生活の舞台を通して模索しようとしているのだ。彼女の作家活動は、興味ある思想を登場人物に投影させ、彼らを小説という実生活の舞台に立たせることによって、それらの思想が実際にどのような影響をどれだけ及ぼし得るのかを検討する一連の実験活動だったのである。Eliot はそうした模索を通して、生きる支えとなるよりよい思想をつかもうとしていたのだ。Eliot が、Dinah の人物設定にあたって、己の理想とする宗教概念を投影させたのは決して偶然ではない。Eliot は道徳的な宗教概念を体現させた Dinah という人物を通して、それが実際にどこまで道徳的な影響を及ぼせるのか小説という人生の舞台の上で試してみたのである。

II Sympathy

Dinah の宗教が愛と哀れみにあることは前章で述べた。そして彼女の愛と哀れみは「最良の洞察と最上の愛を包括する」(488) “sympathy” という形をとって周囲の人々に慰めをもたらすのである。Dinah は夫の死に打ちひしがれた Lisbeth に対して次のように話しかける。

‘Yes’, said Dinah, careful not to oppose any feeling of Lisbeth’s, for her reliance, [. . .] on a divine guidance, always issued in that finest woman tact which proceeds from acute and ready sympathy, — ‘Yes; I remember, too, when my dear aunt died, I longed for the sound of her bad cough in the nights, instead of the silence that came when she was gone.[. . .]’ (112)

ここでは、Dinah の「宗教心」(“reliance, [. . .] on a divine guidance”)が鋭い即座の同情からくる機転となって表れている。ただ元気をだすよう説得する Seth とは違い、彼女は Lisbeth の感情には逆らわずひたすら共感しよう

とする姿勢をあくまでくずさない。彼女は自分も同じように肉親である伯母を亡くした経験を語りだす。Dinah は伯母の死とその悲しみを思い出すことで、「家族の死」という Lisbeth の苦しみに共感しようとしているのである。そしてこのような Dinah の姿勢は徐々に Lisbeth の心を和らげていく。Lisbeth は、Dinah の話を聞いているうちに、苛立つことも忘れて大人しくなっていく。愚痴と涙ばかりこぼしていた Lisbeth は Dinah が側にいることで大人しくなり、Dinah の中に慰めを見出したのである。そしてついに彼女は Dinah の勧めに従って、今までいくら Seth にうながされても片付けようとはしなかった居間を掃除することに同意したのだった。Dinah の sympathy が Lisbeth の悲痛をなだめたのだ。

このように sympathy には人の悲しみを癒し、生きる力を与える道徳的な力がある。Eliot は sympathy の影響力を次のように表現している。

My own experience and development deepen every day my conviction that our moral progress may be measured by the degree in which we sympathize with individual suffering and individual joy.¹⁴

Eliot は道徳と sympathy は直接的な比例関係にあると考えていた。Eliot によれば、道徳観とは、人の苦しみや喜びに「共感できる」(“sympathize”)度合いに応じて発達していくものなのである。だがどうやって sympathy が人を救えるというのだろうか。というのは‘But you [Dinah] can do nothing for me. You can’t make ‘em do anything’ (449) という Hetty の声に代表されるように、sympathy には実際の災難をなくす力などないからである。Dinah は死刑の運命から Hetty を救うことはできない。また、心の重荷は物理的な重荷とは違って、共有したからといって重さが二分される訳ではない。いくら Dinah が Hetty の罪の苦しみに共感したところで、あくまでその苦しみは Hetty のものなのである。だが、それにも拘らず、Dinah の sympathy は実際に多くの人々の一特に Hetty の一心を慰めていくのである。一体 sympathy の力とは何なのだろうか。そもそも sympathy とは何なのだろう

か。本章では、sympathy の性質やその力について模索していきたい。

まず、sympathy の定義についてここで触れておきたい。Dinah は、Lisbeth に初めて出会ったとき、自分の訪問の目的を次のように説明する。

God didn't send me to you to make light of your sorrow, but to mourn with you, if you will let me. [. . .] I should like better to share in your trouble and your labour, and it would seem harder to me if you denied me that. (111)

Dinah は Lisbeth の苦難や苦痛を減らそうとしてやってきたわけではない。ただそれらを共有しようとしているのだ。つまり、sympathy とは他者を元気づけようとするのではなく、他者と苦痛を分かち合うことを意味しているのである。そして彼女のそうした姿勢が「結果的に」Lisbeth に心の安らぎを与えたのである。そういう意味では sympathy は二重の意味で道徳的である。なぜなら、「他者と苦痛を共有する」こと自体が、人間にしかできない道徳的な行為だからである。Eliot の夫であり、哲学者でもあった George Henry Lewes は人間を動物界と社会の有機体との共同の産物と捉えていた。彼は、人の自己中心的な性質は人間の動物性の表れだが、他者を思う利他心は主に社会の関係性から生まれたものであることを主張している。つまり Lewes は、egoism を人間の動物的側面、利他性を人間の社会的な側面、と捉えていたのである。彼は、その動物の法則として Individualism を挙げている。¹⁵Egoism には、“native powers of concealment”(325)があり、喜びだけではなく秘密や罪までも独占してしまう。egoist は自分を他者から独立した存在だと思ひ込み、他者と何かを分かち合おうとはしないのである。「共有」という行為そのものが人の社会的なつまり道徳的な一性質を帯びているのである。何かを、それも苦痛を共有しようとする利他的な行為は、それ自体が人間にしかできない崇高な道徳的性質を帯びているのである。sympathy はそれが与える影響だけではなく、その行為そのものが道徳的なのである。

だからこそ sympathy がその力を発揮するためには、その前提として、相

手がある程度道徳的な人間である必要がある。Dinah がいくら愛と哀れみをもって接してきても、相手が心を閉ざしてしまつては「共有」の行為は成立しないからである。このことは、Dinah の sympathy が動物的な人間には効果を示さないことから証明される。Adam Bede の舞台である Hayslope は Eden 的な要素の強い場所であり、そこに住む人々の色濃い動物性は多くの批評家から指摘されているところである。その中でも最も動物に近い存在として描かれているのが、自己中心的な美少女 Hetty である。Hetty は育ての親ともいえる叔父にも、自分が面倒を見てきた子供たちにも、かわいらしいアヒルにも心動かされることはない。Hetty が愛するものは自分の美貌と贅沢だけなのである。そんな Hetty はしばしば “kitten”(359)や “spaniel”(136)に喩えられ、その動物的な側面が強調されている。自分しか愛せない Hetty はまさに動物的な egoism の象徴的存在なのだ。Dinah は Hetty のような幼稚な娘ではいつかはやってくる人生の苦難にとても耐えられまいと心配していた。そこで Dinah は困ったときにはいつでも自分が助けになることを Hetty に約束する。以下はその時の2人の様子を描いたものである。

she [Hetty] felt no response within herself to Dinah's anxious affection;[. . .] she had the timidity of a luxurious pleasure-seeking nature, which shrinks from the hint of pain[. . .]. Hetty, full of a vague fear that something evil was sometime to befall her, began to cry.[. . .]she [Dinah] trusted it was the stirring of a divine impulse. She kissed the sobbing thing, and began to cry with her for grateful joy. (159)

Dinah は人間の苦しみを説き、その時のために精神的な強さを身につける必要があることを語るが、Dinah の愛は Hetty に何の感銘も与えなかった。ただ Hetty は、pleasure-seeking の性質を持つ者特有の pain への恐れから泣き出してしまう。ここでは、Dinah がそれを Hetty の “divine impulse” が刺激されたものだと思え Hetty と一緒に泣きだす姿が描かれている。Dinah は Hetty と共に泣くことで、崇高な感情を共有しているつもりになっているの

だが、上記の抜粋から分かるようにこれは大いなる勘違いである。Hetty にはそもそも Dinah と共有するような愛情など持ち合わせていないのだから。Hetty を左右する感情は快か不快かにしかない。動物的な彼女には Dinah の愛情を理解することもできなければ、感情を分かち合おうとする姿勢を取ることもできなかったのである。Sympathy の力が発揮されるためにはその対象が愛や哀れみを「共有」できる「人間」である必要があるのだ。こうして、Dinah の sympathy は力を発揮することなく、Hetty は悲劇の運命をたどることになるのである。

Hetty の悲劇は、彼女が動物的でありながら人間の女性だったことに起因する。この乖離に本作品の悲劇の本質があるのである。彼女の女性としての悲劇は、Adam との結婚を目の前に Arthur の子供を妊娠してしまうことを発端とする。妊娠が発覚すれば周囲からの軽蔑のまなざしは避けられない。賞賛以外の注目に我慢できない Hetty にとって、Arthur を頼って家出する以外にこれを避ける術はなかったのだ。こうして Hetty のつらい放浪生活が始まるのだが、これは彼女が人間の女性であればこそその悲劇である。彼女がもし本当に kitten や spaniel であったなら、貞節でないことに何の問題があるだろうか。Massey の飼い犬である Vixen は父親のはっきりしない子供を産むが、彼女は軽蔑の視線におびえることなく子犬たちと快適に暮らしているのである。Hetty の悲劇は間違いなく人間であればこそその悲劇である。この過酷な運命の中で Hetty はついに嬰兒殺しを犯し、死刑の宣告を受けるという最悪の形で自らの破滅を招いたのだ。だが、ここで着目したいのは Hetty の人としての運命は、彼女を破滅へ導くと同時に彼女の人としての成長を促しているという点である。U. C. Knoepfelmacher は、「動物から人間へ」というモチーフが Adam の成長過程において展開されていることを指摘している。¹⁶ 主人公 Adam が egoism を乗り越えて sympathy を学んでいく姿は、同時に彼が動物から人間へと成長していく姿でもあるのだ。だが、「動物から人間へ」というモチーフは、Adam だけではなく実は Hetty においても展開されているのである。

法廷の中で、Hetty は白い像のように立っているだけで、有罪か無罪か問われても何も答えようとはしない。彼女は頑なに心を閉ざし、まるで死体の

ように無反応であった。陪審員達は Hetty の頑固な態度を母性の欠如と捉え、このことは判決に不利な影響を与えた。彼らは Hetty を平然と我が子を殺した非情な母親とみなして、ついに死刑判決を言い渡したのである。だが彼女が頑なだったのは、母性が欠如しているためではない。むしろ母性に目覚めたからこそ彼女は頑なにならざるを得なかったのである。以下は Hetty の告白からの抜粋である。

[It] was the baby's crying made me go: and yet I was frightened to death. [. . .] But I went on, for all that: I'd left off thinking about going home – it had gone out o' my mind. I saw nothing but that place in the wood where I'd buried the baby . . . I see it now. O Dinah! Shall I allays see it? [. . .] And when I'd put it there, I thought I should like somebody to find it, and save it from dying; but when I saw it was gone, I was struck like a stone, with fear. [. . .] My heart went like a stone: (455)

彼女は家に帰りたい一心で産まれたばかりの子供を森の中においていったことを認める。この行為は確かに非情な類のものであり、多くの批評家は Hetty の子殺しを彼女の動物性の最たる表れとして指摘している。だが、ここで注目したいのは、「Hetty が子供を連れ戻しに帰ってきた」ということである。Hetty は死ぬほど恐ろしかったにも関わらず、ついに来た道を引き返す。もう家に帰りたいという気持ちはこの時 Hetty の中から消えていた。これは Hetty が自分の安楽（家に帰る）を捨てて、我が子への愛に目覚めた証拠ではなかろうか。Hetty はつらい放浪の旅の間に何も学ばなかったわけではない。彼女は、心細い一人旅の中で、今まで無関心だった動物に対して”fellowship”(375)を抱くようになる。そして自分を育ててくれた叔父夫婦や優しい Dinah のことを懐かしく思い出すのだった。誰に対しても無関心だった Hetty が、つらい旅を通して、少しずつではあるが人間らしい愛情に目覚めていったのである。そして子供の姿だけを求めて歩き出した時、Hetty はついに動物から母となったのである。彼女は子供が消えたことを知った瞬

間、心が石ようになってしまったと語っている。これは愛する我が子を失ったショックに他ならない。Hetty が石のように頑なになったのは、子供を失った悲しみと罪への恐怖からだったのである。Hetty は最後にこうつぶやく。「ダイナ、もう何もかもやってしまったのだから、神様はあの泣き声と森のあそこを忘れさせてくれるかしら」(“Dinah, do you think God will take away that crying and the place in the wood, now I’ve told everything?”, 455) と。彼女が裁判の間、死体のようにになっていたのも無理はない。Hetty の心は、裁判の間もずっと、我が子を亡くした森の中にいたのである。

Hetty は人としての過酷な運命を経て、母の愛と罪の苦しみを知る人間にまで成長を遂げた。だからこそ、今度は Dinah の sympathy を受け入れることができたのである。“She [Hetty] used never to make any return to my affection before, but now tribulation has opened her heart” (457) と Dinah が言うように、Hetty の人としての苦難が Dinah の愛情を受け入れさせたのだ。Hetty は Dinah の sympathy によって心が慰められるのだが、このことは図らずも Hetty が Dinah と共有できるような愛情や苦しみに目覚めていることを証明している。

Hetty は Dinah の愛を「共有」できるだけの「人間」に成長した。ここで、ようやく sympathy の力が発揮できるだけの条件がそろったわけである。さて、今度は sympathy の力についてそれが最大限に発揮された牢獄のシーンから検証していきたい。Dinah は Hetty が死刑判決を受けたことを知り、彼女と最期まで一緒に過ごすために単身で牢獄の中へと入っていく。牢獄の中、Hetty は最初話しかけられても顔をあげようとすらしなかった。だが Hetty は Dinah の愛情のこもった言葉に触れていくうちについには彼女を抱きしめたのだった。Dinah は自分の愛が受け入れられたことに喜び、Hetty を救うために次のように話しかける。

Because, Hetty, you are shutting up your soul against him, by trying to hide the truth. [. . .] While you cling to one sin and will not part with it, it must drag you down to misery after death, as it has dragged you to misery here in this world, my

poor, poor Hetty. It is sin that brings dread, and darkness, and despair: (450)

Dinah は、Hetty が苦しんでいるのは彼女が真実を隠そうとしているためだということ、罪にしがみついている限り罪は死後も彼女を悲痛に引きずり込むだろうということ、罪の苦しみから救われるためには罪を告白する必要があることを、Hetty に説く。Hetty が罪の苦しみから救われるためには、彼女が Dinah の愛を受け入れたのと同じように、罪をも受け入れる必要があるのだ。罪を認めることで初めて、罪の苦しみは和らぐのである。だが、なぜ罪を受け入れることが罪から救われることにつながるのだろうか。Sympathy の力を理解するためにはまず感情の本質をここで述べておく必要がある。Eliot は Essay の中で感情の性質について次のように語る。

Love does not say, 'I ought to love' – it loves. Pity does not say, 'It is right to be pitiful' – it pities. Justice does not say, 'I am bound to be just' – it feels justly.¹⁷

ここでは感情の目的が感情であることが述べられている。愛は愛するべきだから愛するのではない。愛とは愛するものなのである。*Romola* において “it [love] aimed at its own completeness”¹⁸ とコメントされるように、愛情はそれ自体の完成を目指すものなのである。これは、愛や正義感などの肯定的な感情だけではなく、全ての感情に当てはまることである。*Daniel Deronda* のヒロインである Gwendolen は、賭博場で負けはじめたときにどうせ負けるなら徹底的に負けようと試みる。これは、負けることによって生じた否定的な感情を完成させようとする試みに他ならない。罪の苦しみに関しても同じことがいえる。罪をしっかりと認識して罪の意識を完成させることが、罪悪感の目的であり欲求でもあるのだ。感情はどんな感情であってもそれを感じることが第一目的なのである。

感情を完成させるためには他者の存在は不可欠である。“The vainest woman is never thoroughly conscious of her own beauty till she is loved by

the man who sets her own passion vibrating in return”(149)とあるように、Hetty は Arthur という自分の美を意識してくれる恋人を得たとき初めて自分の美を完全に認識した。意識とはそれを反映してくれる他者がいて初めて完成されるのである。罪の意識もそれを告白する他者がいて初めて完成される。自分の罪を認識してくれる他者の存在を得たとき、人は初めて罪悪感を完全に意識することができるのである。だからこそ人は自分の感情や意識に共感してくれる他者を求めるのだ。 “George Eliot is fully aware of the strength of man’s psychological need for a response to his consciousness, for a humanized world”¹⁹ と Bernard J. Paris が主張するように、Eliot は人間には自己の意識に対する応答を求める強い欲求があることを見抜いていた。人間は己の感情を完成させるために、共感してくれる他者の存在を本質的に欲しているのである。以下は夫の死を嘆く Lisbeth の心理を描写したものである。

The kitchen had had none of her attention that day; it was soiled with the tread of muddy shoes, and untidy with clothes and other objects out of place. But what at another time would have been intolerable to Lisbeth’s habits of order and cleanliness, seemed to her now just what should be; it was right that things should look strange and disordered and wretched, now the old man had come to his end in that sad way; the kitchen ought not to look as if nothing had happened. (105)

Lisbeth は元々綺麗好きであったが、夫が死んだときは部屋を片付けようとはしなかった。片付ける気力を失っていたわけではない。Lisbeth は「片付けるべきではない」と感じたから片付けなかったのである。Lisbeth は息子の Adam に共感を求めているが、彼は埋葬の準備にすっかり疲れきってぐっすり寝入っていた(105)。その代償行為として、Lisbeth は部屋の状態を自分の気持ちに合わせようとしたのだ。 “one of the first results of sorrow is

a desperate vague clutching after any deed that will change the actual condition” (340)とあるように、悲しみは周囲がその悲しみに応じて変化してくれることを望んでいる。夫が死んだのに周囲がいつもと同じであることは、Lisbeth にとって耐えがたい苦痛だったのである。悲しみの目的は悲しみの認識、すなわち完成である。悲しみが周囲に—とりわけ他者に—反映されるのを見たとき、悲しみは己を完全に認識し、目的を達成したことにある種の満足を感じるのである。Lisbeth は Dinah の説得に応じて結局部屋を片付けるのだが、それは部屋の代わりに Dinah が彼女の気持ちに共感してくれたからに他ならない。人が sympathy によって慰められるのは、他者が己の苦しみを引き受けてくれるからではない。Sympathy の役割は人の苦しみを減らすことではなく、鏡のように人の苦しみを反映させることにあるのだ。Dinah が sympathy という鏡を差し出すことで、Lisbeth は Dinah の中に映し出された自分自身の悲しみの姿を見ることができた。そのことによって Lisbeth は己の悲しみを認識し、悲しみの意識を完成させることができたのである。Lisbeth は悲しむのをやめることなく、悲しみきることによって心の慰めを得たのだ。Hetty もまた Dinah に罪を告白し、その苦しみを共有することで心が和らいでいく。Hetty が救われたのは、Dinah と苦しみを共有することで、罪の重荷が二分されたためではない。むしろ、罪の重さをきちんと認識し、それを深く悔いたからこそ救われたのである。Hetty は Dinah に告白することで、改めて己の罪の重さに気づくことができた。Dinah が彼女の苦しみに共感したことによって、Dinah の中に彼女の苦しみの反映を見出すことができた。それによって、Hetty は自分の罪や苦しみを完全に認識し、苦しみを受け入れることができたのである。Hetty は罪悪感から逃れることなく、罪悪感が要求するままに深く悔いることで悲痛を和らげたのだ。Dinah が Hetty に説いたように、罪の苦しみは罪から目をそらし続ける限り、どこまでも追いかけてくる。感情の目的は感情である。その目的が達成されるまで感情はどこまでも本人にくっついて離れようとはしない。感情はどんな感情でもそれが完成されるまで永遠に終わらない。罪悪感からくる絶望も罪悪感を受け入れない限り、終わらせることはできないのである。だからこそ Dinah は Hetty に罪を告白しそれを深く悔いることを促したのだ。罪の告白を促す

Dinah の姿は一見「勧告を控え、静かに共感しよう」(114)とする彼女のモットーに反しているように思われるが実はそうではない。Dinah は罪人を責めたり、勧告を与えたりすることではなく、彼らの罪を受け入れて共感することによって悔い改めさせようとしているのである。罪の苦しみは、それを意識し深く悔いることで初めて和らぐものなのだから。牢獄の教戒師も Dinah と同じように Hetty を「悔い改めさせよう」としたが、彼は厳しく問いたてるだけで彼女の思いを受け止めようとはしなかった。悔い改めさせるのに必要なのは責めることではなく、苦しみを受け入れ共感しようとする姿勢 (sympathy) なのである。

苦しみや悲しみはその感情が完成されたときに一感情の目的が達成されたときに一やっと和らいでいく。これは完成された感情がどこかに消えてしまうことを意味しているのだろうか？いや、そうではない。Eliot は“*It would be a poor result of all our anguish and our wrestling, if we won nothing but our old selves at the end of it*” (488) と主張している。悲しみや苦しみは完成されたときに消えていってしまうのではなく、別の形に昇華していくのである。Hetty はそれまで死の恐怖や子供を失った悲しみ、そして罪の苦しみの中でもがいていたため、彼女の行為が身内の Poyser 家や婚約者の Adam をも傷つけていることにまで気を配っていなかった。だが、Dinah の sympathy を通して、それらの感情をきちんと受け止めることができたとき、Hetty は Poyser 家の人々に謝罪の手紙を書き、Adam に許しを請い、更には自分を破滅に陥れた Arthur をも許そうと努力する。Hetty の悲しみは完成されて、他の人を思いやる優しさに昇華されていったのである。Dinah は悲しみと愛情の関係について次のように語る。

Surely it is not true blessedness to be free from sorrow, while
there is sorrow and sin in the world: sorrow is then a part of
love, and love does not seek to throw it off. (329)

Dinah は Seth に当てた手紙の中で、「悲しみから逃げることはよくないことだ。悲しみは愛の一部なのだから」と語る。悲しみが存在する限り、それか

ら逃げるのではなく、受け入れることが大切なのである。悲しみは愛情の子供のようなものなのだ。悲しみは受け入れられ認識されたとき、それは他者の悲しみを思いやれるような愛情に形を変えていくのである。そして、悲しみを愛情に昇華させるには sympathy の存在が必要不可欠である。人は他者が自分の苦しみを受け入れて共感することによって、初めて自分の苦しみを受け入れることができる。己の感情を完成させるためには、それを反映させる他者の共感がまず必要なのである。Sympathy の力とは実際の災難をなくす力でも人の苦しみを軽減させる力でもない。Sympathy には人の感情を完成させ、それを愛情に昇華させる力があるのである。

III 宗教の力

Sympathy には他者の苦しみを受け入れることで、それを優しさや愛情に昇華させる道徳的な力がある。だが、これは誰にでもできることではない。第2章で述べたように“sympathy”はその影響力だけではなく、行為自体に道徳的な性質を帯びている。人の弱さや過ちを受け入れ、共感することは、人を責めることよりも遥かに難しいことなのである。Irvine 氏は人の過ちや弱さを受け入れることのできる sympathy の持ち主として描かれているが、彼の sympathy は Dinah のそれよりも強くない。Irvine 氏は Hetty の過ちには一切共感を示そうとはしなかった。彼が共感を示したのはあくまで Adam の苦悩や Arthur の過ちに対してであって、Hetty に対してはほとんど哀れみなど感じていなかったのである。さすがの Irvine 氏も子供を殺すような娘には同情の余地などないと思ったのであろう。Adam に関しても同じことがいえる。苦悩という洗礼を通して sympathy を学んだ Adam は、“I'll stand by her – I'll own her – for all she's been deceitful” (430) と宣言し、Hetty の罪を受け入れる姿勢を見せている。だが、その Adam も牢獄の中まで入って行って Hetty を救おうとはしなかったのである。おそらく Hetty の罪があまりにも重いものだったため、それを進んで受け入れる程には心の準備ができていなかったのだろう。誰よりも助けを必要としていた Hetty が心

を閉ざしていたのは、子供を失ったショックからだけではない。Hetty は本能的に誰も彼女の苦しみを本気で受け入れようとはしないことを知っていたのである。だが誰もが尻込みするような状況の中で、Dinah だけは何の迷いもなく進んで Hetty の罪を受け入れようとした。Gillian Beer は“Hetty is abandoned by the male characters, including Adam”²⁰と主張しているが、これは Adam や Irwine 氏が薄情だというより、むしろ Dinah の sympathy が桁外れに強いことを意味している。Dinah だけが、Hetty の罪を本気で受け入れるだけの強い sympathy を持っていたのだ。

Dinah の sympathy の強さは生来の愛情深さもあるが、主に彼女の神への信仰によるものである。Eliot に多大な影響を与えたとされる Feuerbach は、その著作「キリスト教の本質」において、神とは己の心情を投影した image であり、神の認識は人の自己認識であることを主張している。つまり愛や哀れみが心情の Dinah にとっては愛や哀れみこそが神なのである。以下は Dinah の祈りのシーンからの抜粋である。

She closed her eyes, that she might feel more intensely the presence of a Love and Sympathy deeper and more tender than was breathed from the earth and sky. That was often Dinah's mode of praying in solitude. Simple to close her eyes, and to feel herself enclosed by the Divine Presence;[. . .]. (156)

彼女は目をつぶることによって愛や同情の存在を強く感じることができる。彼女はこれを“Divine Presence”と捉え、彼女の外側にあるもののように知覚しているが、この愛と同情は彼女自身のものに他ならない。目をつぶることによってより強く感じられる存在とは本人の内側にあるものであって外側ではないのだ。「キリスト教の本質」によると、神への祈りは人間が自己を2つの本質に分割することであり、一人間が自己と、すなわち自らの心情と、とりかわすところの対話を意味している、とある。²¹Dinah が祈るときに感じる愛や同情は神の姿ではない。これは神のイメージに結びつくことで客体化された彼女自身の心情の姿なのだ。だが、神が絶対的な創造者ではなく己の

心情を投影した姿にすぎないのなら、神や宗教は人に対して無力なのではないだろうか。この疑問に対して George Eliot は次のような Essay を残している。

There is no such thing as an impotent or neutral deity, if the deity be really believed in, and contemplated either in prayer or meditation. Every object of thought reacts on the mind that conceives it, still more on that which habitually contemplates it.²²

ここで Eliot は、神はどんな神であってもそれを本気で信じる人の心には影響力があることを主張している。なぜなら思考の対象はそれを信じる人の心に反作用を及ぼすからである。人はまず、自分の心情を神のイメージに結びつけることで、自らの本質を外に移す。そして神という客体化された自己に祈り、働きかけることで、その思考の対象である神もまたそれを信じる人の心に働き返してくるのである。私達はこの作用・反作用の影響力を Dinah の中に見ることができる。

[. . .] her [Dinah's] imagination had created a thorny thicket of sin and sorrow, in which she saw the poor thing [Hetty] struggling torn and bleeding, looking with tears for rescue and finding none. It was in this way that Dinah's imagination and sympathy acted and reacted habitually, each heightening the other. (157)

ここで、Dinah は、罪と悲しみのイバラの中でもがく Hetty の姿を想像力によって描き出している。そして描き出されたこの宗教的なイメージは Dinah の sympathy をかきたてる役割を果たしているのである。ここでは、彼女の想像力と sympathy が「互いに作用しあい」(“acted and reacted”)、互いを高めあっていく様子が描かれている。自身が創りあげたイメージと自身の心

情との間を行き来しているうちに、Dinah の sympathy はその反復の中でどんどん高まっていったのである。宗教とは、自らの心情をまず外に移し、それから後にそれを自らの内に見出すという心情の循環作業である。“Iteration, like friction, is likely to generate heat instead of progress”²³ という *The Mill on the Floss* のナレーションによく示されているように、心情の反復作業には摩擦のような熱を生み出す働きがあるのである。Dinah の sympathy が並外れて強いのはこのような循環作業によってどんどん高められていった結果である。宗教には sympathy の増幅効果があるのだ。

だが、ここで注意したいのは、宗教が sympathy を高めるという道徳的な影響力を持つのは、それを信仰する人の心情が愛や哀れみにあるときだけだということだ。神は己の心情が投影された姿である。ということは、利己的な人が信仰する神は当然利己的な神、ということになる。利己的な神が生み出す効果は己のエゴイズムの増幅に他ならない。宗教は諸刃の剣である。利己的な人が信仰する宗教にはその人を善へと導くどころか、その利己心を増幅させる力があるのである。例えば、Arthur は罪悪感に駆られたとき、次のような考えで良心の呵責をなだめようとする。

A sudden dread here fell like a shadow across his imagination
– the dread lest she should do something violent in her grief
[. . .] But he shook them off with the force of youth and hope.
[. . .] There was a sort of implicit confidence in him that he was
really such a good fellow at bottom, Providence would not treat
him harshly. (316-317)

Arthur は、Hetty との関係を清算しようと決心したとき、彼女が絶望のあまり何か思い切ったこと（おそらく自殺など）をするのではないかという恐怖にかられる。だが、彼は彼の若さと希望で恐怖を打ち消してしまう。そして、その希望の中には、自分は本当はいい奴であって、神意が彼を酷くは扱わないだろうという思いが多分に含まれていたのである。ここでは、神意が、彼が感じるべき罪悪感と恐怖を抑え、自分に都合の良い希望を助長させる役割

を果たしている。利己的な Arthur にとっての神は彼の利己心そのものである。だから Arthur にとっての神意は彼に都合の良いように世の中を動かそうとする意志に他ならない。利己心の強い人は神意にかこつけて、その利己的な行為を正当化してしまう。神は、それが利己心の投影であるとき、利己心を助長させる非道徳的な力を持つのである。Eliot が「神の概念は神が人の感情の純粋な要素に共感する存在として考えられるときのみ、真に道徳的な力を発揮するのだ」と主張したのはこういう訳なのである。Dinah のように、愛と哀れみを神の概念として信仰する者にのみ、宗教は道徳的な力を発揮するのだ。

Eliot は、己の理想とする道徳的な宗教を Dinah に投影することで、その道徳的な影響力を検証しようとした。そして Dinah は嬰兒殺しの罪をも受け入れる強い sympathy を発揮することで、宗教の道徳的な効果を立証してみたのだ。Dinah の宗教には sympathy を増幅させる道徳的な効果が確かにあるのである。だが Eliot は、Dinah を通して、宗教の道徳性を確証すると同時に、彼女の中に宗教の限界をも見出している。宗教はどんな宗教でも万能ではない。Dinah のような道徳的な宗教にも限界があるのだ。Adam は宗教の弊害を次のように説明する。

I'm not for laughing at no man's religion. [. . .] Only I think it 'ud be better if their consciences 'ud let 'em stay quiet i' the church. [. . .] And there's such a thing as being over-speritlial; we must have something beside Gospel i' this world. Look at the canals, an' th' aqueducts, [. . .]; a man must learn sommat beside Gospel to make them things, I reckon. But t' hear some o' them preachers, you'd think as a man must be doing nothing all's life but shutting's eyes and looking what's a-going on inside him. (11)

宗教の弊害は Adam の “over-speritlial” という言葉に全て要約される。Adam は決して精神的な側面を軽視していたわけではない。彼は、仕事をするため

には、仕事をしようという意志や決心、そして自分の安楽を求める以上の愛が必要であることを語っている(182)。だが、仕事をするためには物質的なものやはり必要なのである。Adam は宗教的な人間は、精神的な側面にばかりかまいすぎる傾向があることを指摘している。宗教は精神面を高めすぎるあまり、物質面や肉体面をおろそかにしてしまう傾向があるのである。

一見完全無欠に思われる Dinah もこの宗教の弊害から免れていない。Dinah は“*It's quite right the land should be ploughed and sowed, and the precious corn stored, and the things of this life cared for, [. . .]*” (79)と語り、一見物質面をも重視しているかのように見える。だが、ほとんど食事を取ろうとせず一日中歩き回っても疲れを覚えない Dinah が肉体的な欲求をあまり感じていないのは明らかである。彼女は、親しい人の側で落ち着きたいという肉体的な現前への欲求すらあまり感じていない。いや、彼女は肉体に対する意識すら持っていないとさえいえる(“*unconscious of her outward appearance*”, 24)。彼女は人間というよりむしろ “*angel*”(499)に近い精神的な存在なのだ。だが肉体を離脱した天使には、“*flesh and blood*”を具えた人間が持つ欲求を理解することはできないのである。

For those children of God [. . .] can never more be sundered,
though the hills may lie between. For their souls are enlarged
for evermore by that union, [. . .].(330-331)

上記の引用は Dinah が Snowfield から Seth に当てて出した手紙からの抜粋である。Dinah が Poyser 夫人の制止を振り切って Hayslope を去ったのは、彼女の心が冷たいためではない。彼女はどんなに肉体が離れ離れになっても、心でつながってさえいれば実際に分け隔てられることはないと考えていたのだ。彼女は他者との絆を大切にしたいという精神的な欲求を感じてはいるものの、肉体的に側にいる必要性を特に感じていない。Dinah は無意識のうちに、相手も自分と同じように心の絆さえあれば離れていても平気だろうと考えているのである。自分の肉体面を軽視してしまう人は、ついつい他者の肉体面をも軽視しがちである。だから Dinah は、彼女を側におきたいという

Poyser 夫人の肉体的な現前への欲求を本当の意味で理解することができなかったのだ。“If you loved your neighbour no better nor you do yourself, Dinah, it's little enough you'd do for him. You'd be thinking he might do well enough on a half-empty stomach” (190-191)という Poyser 夫人の指摘は正鵠を射ている。Dinah は頭の中では他者の肉体的な欲求を理解しているつもりになっているが、自身が肉体的な欲求に無頓着なため、本当の意味でそれを理解することができないのである。

だが、Dinah が肉体的な欲求を感じていないというのは正確な表現ではない。正確には、精神的な力が強すぎるため、精神が肉体の欲求まで果たしてしまうのである。Dinah は、彼女の心情の投影である神の概念を、実体を供えた目に見える存在として認識している。このことは、肉体と精神の区別がほとんどついていないことを意味している。Dinah の肉体と精神の混同は作品中に何度か言及されているところである。その一例として以下の文章を引用する。

I shall think of you [Hetty] often when I'm at Snowfield, and see your face before me as it is now. It's a strange thing – sometimes when I'm quite alone, sitting in my room with my eyes closed, or walking over the hills, the people I've seen and known, if it's only been for a few days, are brought before me, and I hear their voice and see them look and move, almost plainer than I ever did when they were really with me so as I could touch them. (141)

Dinah は、離れ離れになっても、Hetty がまるでそこに実在するかのように見えることになるだろうと語る。彼女は目をつぶると、自分の見知っている人々が目の前に現れて、まるで実際に側にいて触れられるかのように、彼らの声や顔を聞いたり見たりすることができるのである。彼女の想像力は実像とほとんど区別のつかない幻影を産みだすことができるのだ。そしてこのリアルな幻影があたかもその人が側にいるかのような錯覚を Dinah にもたら

すのである。彼女が親しい人の側にいたいという肉体的な現前への欲求をほとんど感じないのはこのためである。彼女は想像力によって、実際に親しい人の側にいるのとほとんど変わらぬ状況を創りだすことができるのだから。つまり精神が肉体に取って代わる程の力を持っているのである。Dinah が己の肉体的な欲求にほとんど無頓着なのは、精神が肉体の役割まで果たしているからである。Dinah の宗教は彼女の精神を高めるあまり、彼女の肉体的な欲求を結果的に抑えてしまっている。そしてこの点に宗教の限界があるのだ。

人は何か価値のある仕事をするためには、Adam が主張するように、精神と物質の両方が必要なのである。これは人を救うという道徳的な仕事にも当てはまることである。人間は精神的な欲求だけではなく、肉体的な欲求も持っている。人が真に救われるのは、この両方の欲求が満たされたときだけなのだ。人を善へと導くのに必要なのは愛と同情だけではない。愛や同情を体現する肉体的な人間が必要なのである。このことは、Bessy Cranage の例によって証明されている。Bessy は、Dinah の影響で堅実な人間になろうと改心したが、彼女が Hayslope を去った途端に虚栄心につけるだらしない生活に逆戻りしてしまった。この事実は、「心でつながっていれば離れていても大丈夫だ」という Dinah の考えが間違っていることを証明している。Bessy を道徳的に向上させるためには、Dinah が側に居続けることが必要だったのである。牢獄のシーンで、Dinah が Hetty の心に慰めをもたらしたのは、彼女が愛と同情をもって接したからだけではない。Dinah が、愛と同情をもって、最後まで Hetty の側にいることを約束したからなのだ。精神的な愛や同情とそれを表現する実在としての肉体が一緒になって初めて人を救う道徳的な力が発揮されるのである。人に道徳的な影響を与えるのは、愛や同情を体現する人間が「側にいる」ことが必要不可欠なのである。

IV 肉体の目覚め

Dinah は精神的側面が肉体的側面を凌駕している人物である。しかし、完全に肉体的な側面に欠けているという訳ではない。Peter C. Hodgson は、Dinah は精神的でありながら、Adam に恋をするような官能性にも恵まれて

いることを主張している。²⁴ 作品の前半部では、圧倒的に前者が優勢だった Dinah だが、Adam への恋が彼女の肉体面を促進させ、エピローグでは Adam との子供たちに囲まれふっくらと太った Dinah の姿が描き出されている。Adam への恋や彼との結婚が、Dinah の肉体的な側面を開花させたのだ。だが、多くの批評家はこの結末を芸術的な欠点として批判している。例えば Lord David Cecil は、この結婚には、善良な人間同士を結婚させようという著者の道徳的な意図が多分に働いていると捉え、この意図が実際は結ばれそうにない 2 人を結びつけたのだと主張している。²⁵ Dinah は「自分自身の望みや欲求を一切もたず、神や神の被造物である人間の悲しみや喜びの中にのみ生きる」(509) ことを人生のポリシーとして謳っていた人物である。その Dinah が、Adam のプロポーズを受けたわずか数週間後に彼への愛に生きる決心をするという展開は、確かに唐突であり、不自然だという印象を免れ得ない。しかし、実は彼女の宗旨変えは唐突ではないのだ。確かに彼女の肉体的側面を開花させたのは Adam への恋である。だが、肉体としての Dinah の目覚めは、sympathy が最大の効果を発揮した牢獄のシーンからすでに始まっているのである。本章では、Dinah が肉体に目覚めて、Adam と結婚するまでの過程について考察していきたい。というのは、Dinah が肉体に目覚めて、Adam と結婚するまでの過程は、同時に彼女が宗教の欠点を克服していく成長過程でもあるからだ。Eliot は Dinah を通して宗教の長所と欠点を作品の半ばにおいて見極めることができた。だから Eliot は、作品の後半部を Dinah の肉体性の強化に充てることによって、より道徳的な生き方を模索しようとしたのである。Dinah の変遷を考察することは、Eliot におけるより道徳的でより理想的な生き方を見出すことにつながるだろう。

Dinah は、牢獄の中、その愛と同情によって Hetty の苦痛を和らげる。彼女は、死後も神が彼女の側にいて愛してくれることを語り、この考えは Hetty の死の恐怖をなぐさめた。しかし、神の愛や同情を理解した Hetty が Dinah を必要としなくなったかということそうではない。彼女は罪の苦しみや死への恐怖が和らいだ後も Dinah の存在を切望したのである。

She [Hetty] was clinging close to Dinah; her cheek was against Dinah's. It seemed as if her last faint strength and hope lay in that contact; and the pitying love that shone out from Dinah's face looked like a visible pledge of the Invisible Mercy. (460)

Hettyは目に見えない哀れみの目に見える証拠として Dinah との接触に希望を託している。Dinah は Hetty にとって目に見えない愛や同情の存在を裏付ける物理的な証拠だった。Hetty は Dinah を通して目に見えない神の愛や同情を感じることができたのである。このことは、逆に Dinah がいないと、愛や同情を感じることができないことを示している。Hetty が Dinah を手放そうとしなかったのはこのためである。彼女は目に見えない神の愛や同情の存在を聞かされただけでは満足できなかった。彼女はそれを体現した目に見える実在としての Dinah を必要としたのである。Hetty は愛や哀れみといった精神的存在と共に Dinah という肉体的存在を欲した。Hetty は、愛や同情を体現する実在としての Dinah が側にいることに心の安らぎを見出したのである。Dinah は Hetty の側にいることで、彼女を救うという道徳的な仕事を真に果たすことができたのだ。そしてこの牢獄での一件は Dinah の自己認識に大きな変化をもたらすことになる。Hetty の一件は、人を真に救うためには、その人の側にいる必要があることを Dinah に教えたのである。

Hetty の肉体的な現前への欲求は Dinah にとって一種の発見であった。Dinah は、Hetty を救うためには愛や同情の存在を聞かせるだけでは十分でないことに気がついた。Dinah は自分が常に彼女の側にいる必要があることを悟ったのだ。 “I must hasten back to her, for it is wonderful how she clings now, and was not willing to let me out of her sight.”(457)とあるように、Dinah は Hetty が一時も彼女を離そうとしたがらないことに戸惑いを覚えながらも、彼女の肉体的な現前への欲求に応えて一刻も早く彼女の側に戻らなければならない必要性を感じている。この時すでに Dinah は「心でつながっていれば離れていても大丈夫だ」というかつての自分の考えが間違っていることに気がついている。このことは、Dinah が人の肉体的な現前への欲求を認めたのみならず、必要とされている己の肉体的現前が持つ価値をも認

めたことを示唆している。Hetty が Dinah に己の肉体的価値を悟らせたのだ。Hetty が Dinah の肉体面を目覚めさせたのだ。Hetty は Dinah を通して愛や同情といった精神的存在の重要性を悟ったが、Dinah もまた Hetty を通して人の肉体的存在の重要性を理解したのである。だが、Hetty が Dinah を必要としたことによって、Dinah に与えた影響は肉体的価値の認識だけではない。牢獄での一件にはもう 1 つ別の影響があったのである。

物心がついた頃から孤児であった Dinah は、それまで必要不可欠な存在として人から求められたことはなかった。叔母である Poyser 夫人は Dinah を側に置くことを望んでいたが、いくら彼女を可愛がっていたとはいえ、それはあくまで「我が子の次」であった。Poyser 夫人が Dinah をクッションに喻えていることから分かるように、叔母にとって Dinah は「側にいてくれればありがたいが、いなければいけないでも特に困ることはない」というような存在だったのである。Dinah もそのことに気がついていて、Dinah は“You don't really want me now” (476) というように、叔母の中での自分の位置を正確に把握していたのである。Dinah が困っている人々を求めて、あちこち移動していくのは、1 つには Dinah の孤児という孤独な立場からきている。Dinah には自分を誰よりも愛してくれる両親がいなかった。切実に側にいることを求められたことがなかった。だから彼女は 1 つの場所に留まる必要性を特に感じなかったのである。Dinah が肉体的な欲求に無頓着だったのは、宗教の影響だけでは説明できない。彼女は他者から不可欠な存在として必要とされたことがなかったため、元々自己の存在にあまり価値をおいていなかったのである。そして宗教がその傾向に拍車をかけた結果、肉体的欲求を含めた自我の希薄な Dinah のごとき存在が生み出されたのだ。

自己の存在を重視しない Dinah は、個人としてではなく、神の使者として生きる道を選んだ。彼女は神の使者として特定の個人に特別な愛情を抱くことがなかった。自我の希薄な Dinah には、個人としての愛情を抱くこともできなかったのである。第 3 章で詳しく述べたように、Dinah が並外れた愛と同情の持ち主であることは確かである。しかし、“But she [Dinah] doesn't love me, lad, only as one child o' God loves another. She'll never love any man as a husband – that's my belief”(122) という Seth の台詞からも分かる

ように、Dinah は神の使者として神の子である人類全般を愛していたのであって、特定の個人を特別な存在として愛したことはなかった。彼女の愛は博愛であつても偏愛ではなかったのである。Dinah は誰からも必要不可欠な存在として愛されたことがなかった。だからこそ Dinah も特定の個人に愛情を注ぐことを知らなかったのである。博愛主義が Dinah の人生のスタンスだったのだ。だが牢獄での一件が Dinah の人生のスタンスを大きく変えた。Hetty が Dinah を切実に必要としたことは、Dinah の肉体面のみならず精神面にまで影響をもたらしたのである。

Hetty もまた孤児であつたために元々弱い孤独な立場だった。だからこそ、Hetty は、罪を犯した途端に身内の Poyser 家の者から捨てられてしまう。Hetty には Dinah しか頼れる人がいなかった。Hetty は唯一絶対の存在として Dinah を愛し、必要とした。そしてこのことが、Dinah の個人的な愛情を目覚めさせたのだ。

But she [Dinah] felt the Divine Presence more and more, - nay, as if she herself were a part of it, and it was the Divine pity that was beating in her heart, and was willing the rescue of this helpless one. (449)

Dinah は神の存在が彼女の一部となつて己の中で脈打ち、進んで Hetty を救おうとしているのを感じた。彼女はこれまでも愛情が命じるままに貧しい人々や困っている人々を助けてきた。だが彼女はこれらの慈善活動が己の愛情の為せる業であることを自覚していなかった。彼女はそれまで己の愛情を神のイメージに投影することで自己の外側にあるものとして認識していた。だから Dinah は、自分の愛が要求するものを「神の意志」として自分から離れたものとして認識していたのだ。しかし、この時 Dinah は神の存在と自己の存在を一致したものとして認識している。Dinah は愛情の存在を離れたものとしてではなく彼女自身の胸から脈打つものとして知覚している。このことは Dinah が「偏愛」に目覚めたことを示唆するものではなかろうか。Dinah は Hetty に対する個人的な愛情に目覚めたため、己の愛情を自分から離れた

「神の意志」として割り切ることができなかった。Dinah はこの時神の使者としてではなく、個人として、Hetty を救おうとする意志に溢れていたのである。このことは、“I’m come to be with you, Hetty – not to leave you – to stay with you – to be your sister to the last”(448)という Dinah の台詞からも察することができる。Dinah は神の使者としてではなく、Hetty の姉として、彼女を救おうとしたのである。Hetty が目覚めさせたのは Dinah の肉体的側面だけではない。Hetty は Dinah を不可欠な存在として必要とすることで、Dinah の個人的な愛情をも呼び覚ましたのである。Dinah は Hetty を救ったが、Hetty もまた Dinah の肉体的欲求や個人的愛情を呼び起こすことで、埋もれつつあった彼女の自我を救ったのである。だが Hetty は結局島流しに減刑され、Dinah の元から去って行ってしまった。Adam の Hetty への恋が中途半端なまま終わってしまったように、Dinah の Hetty への愛情、ひいては彼女自身の自我の目覚めも、中途半端なまま終わってしまった。だが、この時に芽生えた Dinah の自我は、後に Adam への恋という形で開花していったのである。

Adam と Dinah の結婚は “harvest”(534)という言葉で表現されている。Adam にとって Dinah への愛は「深い悲しみを知ることで生まれたより充実した人生の結果」(“it was the outgrowth of that fuller life which had come to him from his acquaintance with deep sorrow”, 530)だったのだ。彼は Dinah への気持ちを次のように語る。

And Dinah was so bound up with the sad memories of his first passion, that he was not forsaking them, but rather giving them a new sacredness by loving her. Nay, his love for her had grown out of that past: [. . .]. (503)

彼の Dinah への愛は過去のつらい記憶、つまり Hetty の破滅から生まれたものである。悲しみの経験はより豊かな愛情を Adam にもたらした。Adam の悲しみは一年半の年月を経て人を思いやる優しさや愛情に変化していったのである。Adam が Dinah を愛することは、Hetty への愛を捨てることでは

なく、むしろそれを昇華させるものだったのだ。中途半端に終わってしまった Hetty への愛情は、より大きな力を得て、Dinah への愛という形でついに成就されたのである。そして Dinah にとってもまた Adam との結婚は Hetty の一件がまいた種の “harvest” だった。Dinah にとって Adam への恋は、Hetty によって芽生えた肉体的欲求や個人的愛情を開花させるものであったのだ。Hetty の一件以来、Adam と Dinah は Hetty の思い出という絆で結ばれていた(485)。そして互いに Hetty への思いをもてあましていた。この2人が愛し合い、それによって Hetty への思いを昇華させようとするのは、不自然な展開どころか、実は話の流れに沿った納得のいく結末だったのである。Adam と Dinah が終生の愛を誓い合ったとき、この2人の結びつきについて Eliot は次のような見解を述べている。

What greater thing is there for two human souls, than to feel
that they are joined for life – to strengthen each other in all
labour, to rest on each other in all sorrow, to minister to each
other in all pain, to be one with each other in silent
unspeakable memories at the moment of the last parting?
(532)

ここで Eliot は、互いの魂と魂が結びつき、1つとなって、互いを高めあう程素晴らしいものはない、という結論を導き出している。結婚は、お互いが心身共に結びつくことを意味している。神は精神面を高めるが、“flesh and blood”を具えた人間は精神面、肉体面を共に高めることができるのだ。人と人が愛し合い、結びつくことは、精神面と肉体面を互いに高めあうという最高に道徳的な効果が期待できるのである。この作品は、Dinah が説教師として各地を放浪する人生をあきらめて、良妻賢母として Hayslope に落ち着くという形で終わりを迎える。この結末には、Dinah の女性としての自立を奪ったという否定的な解釈もある。だが、第3章で考察したように人を真に救うためにはその人の側にいることが必要不可欠である。Dinah は Adam を愛し、側にいることで、彼を半永久的に救ったのである。彼女は Hayslope に

落ち着くことで、小規模ではあるが、彼女の身近な人々に彼女の道徳的な影響を半永久的に与えることができたのだ。

結

Adam Bede は、Dinah という道徳的な宗教を体現した人物を通して、宗教が及ぼす影響力とその限界を模索した実験的な小説である。以上考察してきたように、愛や哀れみを基調とした宗教は sympathy を増幅させるという道徳的な効果があるものの、精神力を高めるあまりに肉体面を抑圧してしまうという欠点を併せもつ。作品の後半では、Dinah が肉体面に目覚め、Adam に恋することで、その欠点を埋めていく過程が描かれている。Dinah は、Adam との結婚で肉体面の弱さを最終的に克服し、心身共に強い女性となることで人間的な成長を遂げていく。だが、最後に注目したいのは、Dinah は説教師としての人生を捨てた後も神への信仰を捨てていないということである。Neil Roberts は、Dinah にとって Adam との結婚は、純粋なキリスト教徒の生活から個人愛を基調とした人間宗教への移行を意味していると指摘し、彼女が結婚のために “an impressively pure and uncompromising representation of the Christian life” を犠牲にしてしまったと語っている。²⁶ 確かに彼女はあちこち移動し、大勢の人々の前で説教するというキリスト的な生活は放棄してしまった。だが、見落としてはいけないのは、彼女は自分の家で細々と人々に説教することまではやめていないということである。このことは、彼女が Adam への個人愛を基調とした地上の生活を営みながらも、天上の神への宗教を断ち切っていないことを示唆している。Dinah は Adam との結婚後も神への信仰を犠牲にはしなかったのである。Dinah のような宗教には欠点があるとはいえ確かに道徳的な効果がある。欠点があるからといって道徳的な宗教を完全に放棄してしまうのはあまりにももったいない話である。Adam との結婚でその欠点を埋めることができたのなら、なおさらそれを捨てる必要はない。George Eliot は手紙の中で “the idea of God, so far as it has been a high spiritual influence, is the ideal of goodness entirely human (i.e., an exaltation of the human)”²⁷ と語っている。Dinah の神はま

さに、高い精神的な影響力を持つ、愛や同情といった善の理想の姿である。道徳的な生き方とは、Dinahのように個人の愛情を基調にした人との絆の中に生きつつ、“exaltation of human”である神という理想を追い求めることなのだ。George EliotはDinahを通してより良い生き方を模索しようとした。そして私達は良妻賢母でありながら神への思いを失わない Dinah のエピソードの姿に Eliot が模索の結果導き出した結論を見出すことができるのである。「他者との絆の中に生きながら神という理想を失わない」—これが Eliot の提唱するもっとも道徳的な生き方なのだ。

註

1. George EliotにおけるFeuerbachの影響は、Bernard J. Paris, *Experiments in Life: George Eliot's Quest for Values* (Detroit: Wayne State University Press, 1965) や U. C. Knoepfelmacher, *Religious Humanism and the Victorian Novel: George Eliot, Walter Pater, and Samuel Butler* (Princeton: Princeton University Press, 1965) において詳しく言及されている。
2. Basil Willey, *Nineteenth Century Studies* (London: Chatto&Windus, 1955) 238.
3. Gordon S. Haight ed., *The George Eliot Letters*, vol.3 (New Haven: Yale University Press, 1954-6) 231.
4. *Letters*, vol.2, 503.
5. George Eliot, *Adam Bede*, ed. Stephen Gill (London: Penguin Books, 1985) 24. 以後、本書からの引用は、本文中の括弧内にページ数のみを記す。
6. Thomas Pinney, ed. *Essays of George Eliot* (London: Routledge and Kegan Paul, 1963) 187.
7. George Eliot, *Middlemarch*, ed. Rosemary Ashton (London: Penguin Books, 1994) 619.
8. Bernard J. Paris, “George Eliot's Religion of Humanity,” *George Eliot: A Collection of Critical Essays*, ed. George R. Creeger (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1970) 25.
9. *Letters*, vol.3, 176.

10. Kathleen Watson, "Dinah Morris and Mrs Evans: A Comparative Study of Methodist Diction," *George Eliot: Critical Assessments*, vol.3, ed. Stuart Hutchinson (Mountfield: Helm Information, 1996) 40.
11. Paris, *Experiments in Life*, 118.
12. *Letters*, vol.2, 503.
13. *Letters*, vol.6, 216-7.
14. *Letters*, vol.2, 403.
15. George Henry Lewes の研究については、 Bernard J. Paris, "George Eliot's Religion of Humanity," *George Eliot: A Collection of Critical Essays*, ed. George R. Creeger (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1970) 15-16. を参照。
16. Knoepfelmacher, 55-59.
17. *Essays*, 379.
18. George Eliot, *Romola*, ed. Dorothea Barrett (London: Penguin Books, 1996) 254.
19. Paris, *Experiments in Life*, 135.
20. Gillian Beer, *George Eliot* (Brighton: The Harvester Press, 1986) 72.
21. Ludwig Feuerbach, *The Essence of Christianity*, trans. George Eliot, (New York: Harper and Row, 1957) 123.
22. *Essays*, 450.
23. George Eliot, *The Mill on the Floss*, ed. A. S. Byatt (London: Penguin Books, 2003) 168.
24. Peter C. Hodgson, *The Mystery beneath the Real: Theology in the Fiction of George Eliot* (Minneapolis: Fortress, 2000) 59.
25. Lord David Cecil, "Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation" *A Century of George Eliot Criticism*, ed. Gordon S. Haight (Boston: Houghton Mifflin, 1965) 207-208.
26. Neil Roberts, *George Eliot: her beliefs and her art* (London: Elek Books, 1975) 74-75.
27. *Letters*, vol.6, 98.